

望月喜多司記念シンポジウム

『変異と進化を考える：我々はどこから来たのか、どこへ行くのか』

日本が世界に誇る遺伝学者木原均の言葉「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に刻印されている」はつとに有名です。さらに、ゲノムを定義して「ゲノムは染色体の一組で、これを構成する染色体が協力して生活圏および生活現象を営みかつ進化に応ずる単位である」という言葉もあります。

私が本学会の第42回大会をお引受けした頃、丁度、「無毛突然変異:乳飲み子を両手で抱くため直立歩行を強いて、ヒト・類人猿の共通祖先からヒトを進化させた原動力」と題する論文を書いたところでした (Genes to Cells, 17, 264-272, 2012)。突然変異は遺伝病や癌など、ヒトに弊害をもたらす可能性がある一方、変異なくしては進化もあり得ません。そこで、第42回大会のテーマは「変異と進化を考える」とし、そこに「我々はどこから来たのか、我々はどこへ行くのか」を加えました。これは人間と自然、野生と文明の狭間で引き裂かれたゴーギャンの遺作、「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」からとりました。

人類の600万年の進化の歴史をとおして、複数の人種が共存していました。つい4万年前まではネアンデルタール人、デニソヴァ人、フローレス人と共存していました。フローレス人に至っては1万4千年前まで共存していたのです。火と道具を手に入れたホモ・サピエンスは直接手を下さずとも、彼らの生活圏を狭め、絶滅へ追いやったのかも知れません。マンモスも同様かも知れません。最近ではドーヨーその他の鳥類を絶滅させました。ことに1万年前に始めた野生植物の栽培化と改良、そして野生動物の家畜化により、食糧供給の安定的な維持に成功し、住まいを定着させ、社会を形成し、集団を拡大しました。250年前には産業革命をおこし、化石燃料由来のエネルギーを手に入れ、さらに原子力を獲得し、今や地球上には70億人を超える人々が生活しています。炭酸ガスの増加に伴う地球温暖化の影響は日頃の異常気象、大型台風、大洪水、巨大サイクロン等を通して、肌身で感じているところです。

東日本大震災は二つの災害、地震と津波という自然災害と、原子力発電所の破損による放射能汚染という人災とが、複合的に起きたという点で、人類の歴史の上からも象徴的な出来事といえます。今や人類は自らが自然に働きかけて環境を変えつつ生活圏を広げ、これが環境破壊をおこしています。その速さは生物が適応できません。こうして我々はかつて無いほどの速さで他の生物を絶滅に追いやっています。そこで、我々の来し方、行く末を考えてみようというのが、本シンポジウムの狙いです。

望月喜多司記念シンポジウムは 公益財団法人食品農医薬品安全性評価センター (<http://www.anpyo.or.jp>) の提供によります。

「望月喜多司記念賞規程」<http://www.anpyo.or.jp/index-sitemap.html>で ご覧になることが出来ます。シンポジストには望月喜多司記念賞が送呈されます。

日本環境変異原学会
第42回大会 大会長

須藤鎮世